様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１４６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２０１０７

研究課題名（和文）反戦平和言説とジェンダー

研究課題名（英文）Pacifistic discourse and gender

研究代表者
中谷　いずみ（NAKAYA, IZUMI）

奈良教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０３６６５４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1950年代から現代までを分析対象として、反戦平和言説とジェンダー、階級の関わりについて分析を試みた。日本のような政治的イデオロギーを厭う社会では、労働者階級の女性や子どもによる反戦平和の訴えが党派性のない純粋な声と見なされ、メディアの注目を集めることがある。それが政治的な効果を持ち、平和運動を活発化すること場合も多いのだが、そこには問題も潜んでいるのではないか。
本研究は女性による反戦平和言説の称揚が既存のジェンダー観に基づくものであり、特に女性らしさを温存させてしまうこと、政治色の排除を正当化してしまうことから、結果的に保守的な社会の温存に寄与する側面があるという結論に至った。

研究成果の概要（英文）：In this study I attempted to analyze of the involvement in pacifistic discourses, the gender and the class of the speakers from 1950's to the present as the object of this analysis .In a political ideology-phobic society like Japan, women’s discourses on pacifism sometimes draw attention to media, because the appeals for peace by the women of working class or children are considered to be pure and fair without political bias.In some cases they perform well politically and encourage the movements for peace. However, I think some problems are hidden in them.
In my investigation, I revealed these problems.As the praises for the women’s discourses for peace are based on the existing view of gender, they keep social prejudices about gender, class, and especially femininity.They also allow to justify the tendency of exclusion of political coloration.I came to the conclusion that women’s discourses for peace might contribute to keeping the conservative society.

研究分野：日本近代文学

キーワード：サークル運動　生活記録運動　戦争体験　女性表象　児童表象　労働組合　綴方

１．研究開始当初の背景

2010 年 7 月 11 日の朝日新聞（大阪版）に「被曝 60 年アンケート」の自由記述欄を広島大研究グループが解析した結果を紹介した記事が掲載された。そこには被爆者が思いを綴る際に女性は肉親の被爆体験を重視し男性は核兵器廃絶を強く訴える傾向があるとの結果が出ている。成田龍一は「戦争を語ることは自らのアイデンティティを確認する作業」であるとした上で、「戦争の経験の歴史的な意味づけをめぐる対抗や対立」は「広義の意味での「政治」が現れる場所」であると記している（『「戦争体験」の戦後史』岩波書店 2010）。戦争体験の語りのジェンダー差は、このような歴史的意味付けをめぐる「政治」にジェンダーがどのように関わってきたのかを分析する契機になると考え、本研究を試みた。

２．研究の目的

（１）1950 年代における反戦平和運動とジェンダーの関わりを明らかにする

反戦平和運動において女性が書いた文章や、その運動の様子を伝える一般紙や商業雑誌記事の中で女性がどのように語られているかを追うことで、運動における女性がどのように表象されたかを明らかにすることを目的とした。特に階級問題を含む被抑圧者の表象がどのようにジェンダーと結びつくのかについて考える必要がある。党派的イメージで語られやすい運動が、女性の声をどのように取り込むことで方向性を見出していったのか。また、メディアが運動する女性をどのように表象することで、運動のイメージを形成していったのかについて明らかにしたいと考えた。

（２）反戦平和言説の戦争体験語りからジェンダー規範や表象の形成を考える

反戦平和言説において見られる、個人の戦争体験語りから、語りの様式とジェンダー規範や表象形成との関わりを明らかにしたいと考えた。特に「被爆 60 年アンケート」の分析結果にも見られたように、なぜ女性による反戦言説において体験語りが重視される傾向にあるのかを考える上で、ジェンダー規範の問題は欠かせない。反戦平和をめざす言論において、あるいは戦争体験の意味づけを伴うそれらの言説において、ジェンダーはどのように関わっていたのか。発言の主体は自らをどのように自己表象したのか。この点について、ジェンダー規範や表象との関わりを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

反戦平和を訴える人びとの語りの様式分析と、それを人びとに広く伝える役割を担った一般紙や商業雑誌の言説分析とをおあわせて行った。ジェンダーや階級的規範をはらんだ特定の語りの様式が広く流布することで、定型化された主体を形成することがある。反戦平和の言説が、どのような主体を表象し、そこにどのようにジェンダー規範が関わっているのかを明らかにするために、当時の新聞雑誌、刊行物、サークル誌などを調査し、資料収集を行った。またそれらを整理し、データベースに整理した。収集した資料の分析については、文学研究の所産である語り論（ナラトロジー）を援用し、歴史的事象の機制を明らかにするために言説分析を行い、そこに潜むジェンダーや階級に関するバイアスや規範を浮かび上がらせた。

４．研究成果

（１）1950 年代における反戦平和言説の流通とジェンダーの関わりについて、女性表象という観点から明らかにすることができた。

逆コースに抗した反戦平和の動きは、労働組合や左派政党の関わりなどから、イデオロギー的なものと見なされて弾圧の対象とされる中で、女性や子どもが担う反戦平和言説が運動の場で発見された。女性や子どもの反戦平和の訴えは、政治性をもたない純粋な被抑圧者の声としてメディアによっても称揚された。それらが運動に成果をもたらす場合も見られるのだが、しかしそうした称揚は、女性を純真無垢で、理性よりも情愛の主体とするジェンダー観に基づくものであり、そのような見方を再生産してしまうものでもあるということを明らかにした。またそのように称賛される女性の運動主体は、既存のジェンダー規範に沿うために、リーダー的役割につくことはない。男性が運動の牽引的役割を担い、女性は情に基づき訴える主体として運動を代理表象する役割を担うという性別役割分担の構造が革新運動においても見られるのである。それによって運動の成果を得られる場合はしばしばあるのだが、しかしそれはジェンダー秩序を再強化することにもつながる。また、政治運動に対する弾圧が激しい中で政治的無色な主体として女性を称揚し、運動を盛り上げていくことは戦略としてあり得るのだが、しかし政治的主張を排除する動きを加速させる役割をも担ってしまう。その点においてこの戦略は運動の幅を狭めてしまう危険を持っているものであり、それが現在の市民運動において考えねばならない問題であることも見えてきた。

（２）女性による反戦平和言説の体験語りとジェンダーとの関わりについて、個別の書きものを分析することで問題を浮かび上がらせることができた。社会において男性／女性のジェンダー秩序が強固にある中で、この秩序に沿った声がメディアに取り上げられやすいことは事実であり、調査の結果、そのために語りの様式が変容するケースがあったことも分かった。例えば労働組合内では調査分析結果として報告されていた女性の書きものが、刊行物として市場に流通する際には体験語りを主にしたものに変わっていたケ

ースが見られた。これは女性の発言に何が求められていたか、その期待に応じて語りの様式がどのように固定化されていったかを示すものである。また、この様式の固定化がジェンダー秩序の再生産につながることはいうまでもない。このように考えるならば、戦後から現代における反戦の言説ないし平和の言説にジェンダーが深く関わっていること、またそこに含まれる戦争の体験語りや記憶の編成が社会のジェンダー秩序に深く関わるのみならず、秩序の再編成に寄与してきた可能性もあることが、新たな問題として見えてきた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）
中谷いずみ「女子工場労働者の綴方」、仁荷大学韓国学研究所『韓国学研究』、査読無、第 36 輯、2015、pp.151-157

中谷いずみ「『黒い雨』とベトナム戦争」、原爆文学研究会『原爆文学研究』、査読無、第 13 号、2015、pp.179-187

中谷いずみ「論潮六号―特集 金時鐘（書評）」、社会文学会『社会文学』、査読無、第 40 号、2014 年、2014、pp.137-38

中谷いずみ「生活記録と〈運動〉シンポジウムの報告 はじめに [シンポジウム報告]」東京外国語大学海外事情研究所『Quadrante』、査読無、No.16、2014、pp.11-13

中谷いずみ「事態に向き合うために [シンポジウム報告]」社会文学会『社会文学』、査読無、第 37 号、2013、pp.137-140

中谷いずみ「一九三八年、拡張する〈文学〉―火野葦平「麦と兵隊」にみる仮構された〈周縁〉の固有性」、昭和文学会『昭和文学研究』第 64 集、2012、pp.40-52

中谷いずみ「鳥羽耕史著『１９５０年代―「記録」の時代』[書評]」日本文学協会『日本文学』、査読無、第 60 巻 6 号、2011、pp.62-63

〔学会発表〕（計９件）
中谷いずみ「従順な身体と〈ナショナル・アイデンティティ〉―石田衣良「池袋ウェストゲートパーク」にみる〈外国人〉表象」東アジア女性文学研究会国際ワークショップ 於大妻女子大学　2015 年 2 月 28 日

中谷いずみ「女子工場労働者の綴方」（シンポジウム「下からの綴方と他者の文学Ⅱ　労働／資本の文化的転回、あるいは民主主義」）成均館大学東アジア学術院・東国大学校文化学術院主催会議　於東国大学校萬海館模擬法廷　2014 年 11 月 14 日

中谷いずみ「「ラディカル」な運動の戦略／受容―主体表象と承認の政治―」（シンポジウム「ラディカリズムの条件―窮迫する時代を見据えて」）、唯物論研究協会第 37 回研究大会　於東京農工大学　2014 年 10 月 18 日

中谷いずみ「「黒い雨」とベトナム戦争」（「戦後 70 年」連続ワークショップⅠ「原爆文学「古典」再読―井伏鱒二「黒い雨」」）、原爆文学研究会　於名古屋大学 2014 年 8 月 3 日

中谷いずみ「〈当事者／非当事者〉表象とナショナリズム」（パネル「〈当事者／非当事者〉をめぐるポリティクス」）、日本近代文学会国際研究集会　於日本大学　2013 年 12 月 1 日

中谷いずみ「「原爆の子」を読む」原爆文学研究会於神戸市外国語大学　2013 年 8 月 31 日

中谷いずみ「コメント」（シンポジウム「「3・11」以後の社会と文学―文明史的転換点に立って―」にてコメンテーター）日本社会文学会春季大会　於神奈川大学　2012 年 6 月 23 日

中谷いずみ「時間・運動・テクノロジー ― 一九五〇年代における原水爆言説の力学―」日本近代文学会秋季大会　於北海道大学 2011 年 10 月 16 日

中谷いずみ「原水禁署名運動とジェンダー」（ワークショップ「被爆の記憶と原子力の夢―原爆文学から問いなおす―」）原爆文学研究会 於京都大学　2011 年 9 月 24 日

〔図書〕（計４件）
中谷いずみ、青弓社、『その「民衆」とは誰なのか―階級・ジェンダー・アイデンティティ』、2013

中谷いずみ 他、東京堂出版、岩淵宏子・菅聡子・久米依子・長谷川啓編『少女小説事典』、2015

中谷いずみ 他、集英社、浅田次郎・奥泉光・川村湊・高橋敏夫・成田龍一編『コレクション戦争×文学　別巻〈戦争と文学〉案内』、2013

中谷いずみ 他、ひつじ書房、石川巧・川口隆行編『戦争を〈読む〉』、2013

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者　中谷いずみ
（NAKAYA Izumi）
奈良教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：10366544

(2)研究分担者　なし
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者　なし
(　　)

研究者番号：